

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷五十二第

行發日一月七年二和昭

## 論叢

公益團體の課税

法學博士

神戸 正雄

マルクスの農業労働者に関する見解

法學博士

河田 嗣郎

ミルのエソロヂー論

文學博士

米田庄太郎

## 時論

上海中立に關する一考察

法學博士

末廣 重雄

## 說苑

宗門人別改制度の沿革

經濟學士

菊田 太郎

工業分布論に關する文獻

經濟學士

黒正 巖

## 雜錄

精神労働者と獨逸所得税法

法學士

沙見 三郎

獨逸都市に於ける乗合自動車交通

經濟學士

山口 信男

スミスとリストの經濟發達階段說

經濟學士

上田藤十郎

京都帝國大學經濟學會大會記事

## 法令

國債整理共金特別會計法中改正・不良住宅地區改良法・土地貸賃價格調査委員會法・土地貸賃價格調査委員會法施行規則

(禁 轉 載)

# 工業分布論に關する文獻

黒 正 巖

經濟現象が一定の地理的分布をなす事は、夙に學者の唱導する所であるが、之を具體的に研究する事は極めて困難な問題であつた。従て古き時代の經濟學者は多くこの問題にふれ乍ら充分なる實證をなすに至らなかつた。又所謂經濟地理學者の如きも、徒らに商品學的研究に没頭し、或は自然と經濟との相關關係を研究するを以て能事了れりとなし、經濟現象が如何なる地理的分布をなさんとする法則性を有するかを論ずるものは極めて少かつた。故に從來よりの傳統として、この種の問題は純經濟學上の事柄とせられた觀がある。而て近時一方に於て歴史的統計的研究が發達すると同時に、又他方に於て經營學の隆興するに及び、經濟現象の地理的分布に關する研究が盛となり、殊に生産が如何なる所に於て行はるべきか、従て又生産が如何なる地理的分布を形成するやの問題が重要な研究の對象となつて來た。就中工業はその所在決定が最も合理的に行はれんとするの傾向を有し、従てその地理的分布が最も顯著に觀察し得らるゝの故を以て、之に關する研究はその數甚だ多いのである。

元來經濟地理學は經濟現象の空間的分布的研究をなすものであつて、經濟現象の組織論的研究をなす所の經濟原論並に經濟政策學、及びその發生論的研究をなす所の經濟史と共に、廣義の經

濟學を構成するものである。然るに從來の經濟地理學が甚だ不徹底にして科學的體系を備へず、その一部分は經濟原論等に包攝せられ、他は經濟史又は所謂經濟地理學中に於て記述せらるゝに止り、經濟學中の一獨立部門となり得なかつたのである。併し乍ら今日の如く、經濟地域が著しく擴大せられ、經濟社會に於て非合理的要素が次第に排除せられ、經濟的合理主義を目標として、經濟的統制の行はるゝに至つては、空間的分布的現象として經濟を現象論的に研究する事は、科學方法論の立場よりまさしく是認せらるべきであつて、茲に獨立の科學としての經濟地理學が確立せられるのである。即ち從來經濟學一般の問題として居た所の經濟分布論は先づ經濟地理學上の重大部分を占むる事となる。而て經濟分布に關する研究が今日迄如何なる經路を辿つて來たか、そしてそれが何故に經濟地理學の重要な研究對象となりうるかを明かにするには、一應從來の諸學者の研究を檢討するの必要がある。併し之は極めて廣汎なる文獻の涉獵を必要とするのであつて、到底短時日を以てなしうる所ではない。然るに會々、最近入手せる *The Journal of Political Economy*, published by The University of Chicago, April 1927 を見るに、*ポーランド國 Lublin 大學の Witold Krzyzanowski 氏が Review of The literature of The location of industries* と題し、之に關する殆ど凡ゆる文獻を掲げ、之に簡單なる批評を加へて居る。同氏は之に關する大部の研究物を整理中の由であるから、早晚我々は之を經濟地理學界に迎ふるの喜に接しうると思ふが、私は取り敢えず、同雜誌上に掲げられたる所を中心として、その大體を紹介し余の閱讀せるものにつきては多少の卑見をも加へ、然らざるものにつきては氏の所説をそのまゝに抄

出して本稿を草する事とした。

クルジザノウスキー氏は生産の分布といへば、先づ農業的生産の分布、工業の分布、及び商業  
交易交通の分布の三に區別するの必要があるが、之が全體に亘る研究を雜誌の限られたる紙面に  
於て論ずる事は許されないから、工業の分布に關する文献のみにつきて批評すべき旨を斷り、そ  
の他の經濟現象につきては只 Heinrich von Thünen の孤立國に於ける研究が、交通費と農業經  
營の規模とを中心として行はれたる點を數行記述して居るにすぎぬ。チューネン氏以前の工業分  
布論は別として、その以後に於ける研究物は殆ど何れもチューネンの孤立的研究方法を眞似たも  
の、又は之に暗示を得たものであつて、工業分布論の研究には忘る事の出来ないものである。又  
すつと古い所ではアダム・スミスや、佛國天則學派の人々も工業の分布に關して論及する所があ  
るが、併し當時は尙ほ農業が社會の重要な經濟形態であつた、ゆゑ、純粹に工業の分布論を論じ  
たのではなく、寧ろ農業との關係に於て、之を研究し、殊に都市と田舎との地方的分業につきて  
論じたものにすぎない。Rodbertus の如きも各個經濟部門の定<sup>2)</sup>位(Standort)なる名稱を附し  
て、工業の分布を論じては居るが、何れも今日の工業分布論には大した意味を有しない。

工業分布論に關して深く突き込んで研究を遂げた最初の人は G. Fr. Schätke である。<sup>3)</sup> 彼は自然  
的條件と、工場が市場より遠かることを可能ならしむる分布状態とを最も重要視した。而て彼の  
考ふる所によれば、大都市の有する牽引力(attractive force)はその面積の大小に正比例して、都

- 1) Heinrich von Thünen, Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie, Ko-tock 1842.
- 2) Adam Smith, Wealth of Nations, III. 2.
- 3) Bau und Leben des sozialen Körpers, Tübingen 1875; Gesellschaftliches System der menschlicher Wirtschaft, Par. 265-67.

市と工場との距離の大小に反比例するといふ。この後の命題は極めて重要な意味を有し、確かに眞理を道破せるものであるが、彼は工場の規模の大小によつて牽引力の異なる點に氣づかなかつた様である。

次に Wilhelm Roscher は主として歴史的研究に基く材料によつて、工業分布の變遷につき一の原則を述べて居る。即ち社會が充分に進歩せず、分業の盛とならざる時代に於ては、工業はその位置を消費上の利便の存する所に定むるに反し、分業が發達し工業が分化するにつれて、生産上の利便の存する所に定位せんとし、消費地を去らんとする。實に工業の分布を決定し、經濟的將來の建設者を指導する所の自然法則こそは即ち經濟史の動因であると主張する。而て彼の説は久しく一般の認むる所であつて、我國の工業經濟學者の如きも多くこの説をそのまゝに容れて居たやうである。併し乍らこの説は一面の眞理を含むと同時に、尙ほ多くの缺點を有する爲め種々の非難を受けて居る。更に彼は工業分布決定の要素として、原料の豊富なる事、勞働の豊富なる事、資本の豊富なる事、即生産の三要素を擧げて居るが、之は強いてかの經濟發達階段説の三階段に適應せしめたものである。蓋し彼は之等のものが生産物の價格に最も大なる影響を及ぼす決定的の要素であるとしたからである。原則的にいへば所謂生産の三要素によつて工業の分布が決定せらるゝには違ないが、併し乍ら今日の如く、工業が非常なる分化を遂げ、且つ交通が著しく發達せるに於ては、單に生産の三要素といへるが如きものによつて機械的に概括論を試むる事が、複雑極りなき工業の分布状態を具體的に研究する上に、果してどれだけの意義を有するかは疑問

4) Roscher, Ansichten der Volkswirtschaft, Vol. II.; Nationalökonomik des Handels und Gewerbetreibendes (7. Aufl., 1899) S. 667-707; System der Volkswirtschaft Bd. III, 1. S. 85-88

であると思ふ。尙ほ此の分布論については他の機會に於て論じた事があるから、本文に於ては省略する。然るに Edward A. Ross はロッシェアの説をそのまゝに受け入れて、之を祖述して居るが、比較的簡單なる研究にして困難な問題にはふれて居ない。併し文中亦少からぬ示唆を有するが故に、分布論の研究に方つては一應之を閲讀するの必要がある。

## 二

伊太利の經濟學者 Achille Loria は理論的に明確な注目に値ひすべき説を提唱して居る。彼は工業の分布に關する近代的理論の創始者ともいふべきである。彼はこの問題を取扱ふに方つては、主として地代の方面から觀察し、その最初の論文は、主として農業問題を論じ、チューネンの所説を批評し、耕種の合理的秩序は地代によつて決定せられ、地代はチューネンによつて示されたる耕種秩序を屢々變改するものである事を指摘して居る。又工業に關しては、重量の重き財貨の生産は消費地の近くに定位すべきことを述べたが、十年後になつてその所説の誤れる事を自白して居る。「生産過程に於てその重量を喪失する原料は、工場をして消費の中心より移動せしむる。吾人は生産品の運送費と、原料の近くに工場を定位する事によつて齎されたる節約とを比較せねばならぬ。工場の設置は最大の利潤を生ずる所に定位せられる。勞働を多く必要とする貨物の生産は、食料品の生産地に定位せんとするの傾向を有す」。かくの如きロリア氏の理論は人の認むる所とならなかつたが、後に述べんとする Alfred Weber 及びその門下の研究物によつて一般に知らるゝに至つた。彼の理論は極めて深遠なるものにして、今日と雖も尙ほこの種の研究

5) 拙著、經濟史論考一六四頁

6) A. Ross, The location of Industries (Quarterly Journal of Economics, 1896)

に對し重要な根據をなすものである。同國人 *Avv. Gino Macchioro* はロリヤと同じ方面の研究をなし、特に實際生活と密接の關係を保つて居る様である。彼はこの問題を世界經濟の一職能として取扱ひ、殊に氣候及び勞働の影響に重きをおいて研究した。

三

北米合衆國に於ては、*Frederick S. Hall* が千九百年の第十二回國勢調査の材料を用ひて、數種の工業部門の分布に關連して統計圖表を作製した。而して工業の分布を決定する要素を分ちて、(1)原料に近き事、(2)市場に近き事、(3)水力に近き事、(4)適順なる氣候、(5)勞働の供給、(6)工業に投下しうる資本、(7)歴史的に古き起原を有する事の七として居る。氏の研究は、從來の研究と異り、單なる演繹的法則を述べずして、豊富なる統計的材料に基き、之を歸納して理論を構成した點に於て非常なる強味を有するものであつて、爾來この研究はこの種の問題を取扱ふ米國の諸學者に甚大の影響を及ぼした。同國第十三回國勢調査(千九百十年)の報告書も大體工業分布決定の要素につきては前回と同一のものを舉げて居るが、併し地方的要素と地區的要素とを區分し、工業分布を一層論理的に考察するに至つた。之等につきては拙著を参照せられ度い。

英國の經濟學者も千九百年以來この問題にふれる様になつたが、併し一般的ではない。W. Cunningham & A. Marshall も僅にこの問題を論じて居るにすぎぬ。英國の學者が工業の分布に關して特殊な注意を拂はないのは、英國が工業國として古き歴史を有し、工業の分布の變動が新興諸國の如く鋭敏に現はれて來ないといふ事が大きな理由であらう。

7) *Introrno della influenza della fondaria sulla distribuzione delle industrie*, (Accademia dei Lincei, *Rediconti*, IV, v. 4, 1888); *Ricerche Uteriori* (*Rediconti* 1898-99), Verso la Giustizia sociale.

8) *La riforma sociale* (1907), 2d ser., pp. 910-29.

9) 拙著、經濟史論考一七五——一七八頁

工業分布論に關する研究として最も深刻であり、且つ理論的なる著作は、獨逸ハイデルベルグ大學教授 Alfred Weber の *Über den Standort der Industrien* (1909) である。余は先年同大學に於て二學期間同氏の經濟學を聽講したが、氏は一の學期には *Theoretische Nationalökonomie* を講じ、他の學期には *Praktische Nationalökonomie* を講じ、後者は獨逸を國民經濟的統一體としての内部に於ける經濟的編制を、主として地理學的分布的に研究して居る。故に氏は經濟の分布を經濟地理學として論ずるのではなかつたが、余はその當時から日本に於て經濟學を講ずる場合には、日本を一の經濟的統一體としてその空間的編制に關する理論を研究する事は、最も必要であり、且つ興味ある事と考へて居た。而して氏は純粹なる抽象論を行ひ、之を公式化して論究すると同時に、その門下をして獨逸に於ける各種産業の地理的分布を個別的に研究せしめ、已に第七分冊迄出版されて居る。之等の冊子はウェーバー氏の抽象論を經として、歴史的統計的に研究されたものであつて、よく獨逸の工業體(*der deutsche Industrie-Körper*)の編制を覗ふ事が出来る。併し乍ら氏の理論は極めて深遠ではあるが、又餘りに抽象的であるのと、他面氏の文章が甚だ難解で明確を缺ぐ爲めに、我國でも廣く讀まれて居ない様である。殊に、米國人の頭には一層難解であるので、之は餘り顧みられて居ない。固より氏の研究も決して完全なものといふ事は出来な

いが、その新しき見方と方法とは確かに工業分布論研究上の一の新時期を劃したものだといはねばならぬ。

10) *The Localization of Industry* (*Economic Journal* 1902)

11) *Principles of P. E.* Chap. X.

12) O. Schlier, *Der, deutsche Industrie-Körper seit 1860* (1922); C. C. Christiansen, *Chemische u. Farbenind.* (1914); A. Link, *Lederind.* (1913); W. Hangner, *Musikinstrumentenind.* (1919); E. Salomon, Pa-

ウェーバーは千八百九十六年迄の獨逸の材料によつて研究し、工業分布の一般理論と資本主義的理論と分つて居る。前者は工業分布に對する經濟的技術的論據に關するものにして、如何なる時代、如何なる經濟組織に對しても實際上妥當するものであるが、後者は單に資本主義的組織の或る特殊なる性質を示すものとする。W. Sombartは之を批評して次の如く述べて居る。一般理論といふも矢張り或る程度に資本主義的理論である、何となれば一例を以ていふに、この理論は勞働者の賃銀及び地代等の差異を考慮に入れて居るが、併しかくの如きものは社會主義的組織の下に於ては、問題となり得ない要素であるからである。尙ほその他の點につきても多少の非難を加ふべき點を存するが、氏がかくの如く一般理論と資本主義理論とに分ち、更に之を細分して工業分布に關する理法を明かにしたのは彼の一大功績である。故に先づ一般理論の如何なるものなるかを概説しよう。

ウェーバーはその一般理論に於て、工業の分布を支配する要素として、運送指向性 (Transportorientierung) 勞働指向性 (Arbeitsorientierung) 團集性 (Agglomeration) の三を示して居る。即ち工業の分布は工業の運送指向性によつて決定せられる。一定の工業部門は消費地又はその直接の隣接地に成立し、之を遠ざかるは只特殊の理由の存する場合に限られる。工業の移動は生産過程に於て重量を喪失する原料によつて惹起せられる。蓋し重量の喪失が起らないならば、最も重き原料と雖も消費地に運送せられるからである。従て容積及重量の大なる原料それ自身が、當然に工業の移動を惹起するとは限らない。而して氏は、原料の價格の差異、運送費の差異を、噸基

pierind. des Riesengebirges (1920) E. Kahl, Die deutsche Kohlenräure-ind.; A. Hammer, Deutsche Bijonierind. (1922)

13) Einige Bemerkungen zur Lehre von Stand ort der Industrien (Arch. f. Soc. Wiss., Vol. XXX Heft 3)

米 (Tonnenkilometer) に由て表示せる距離の増減量として觀察して居る。運賃の減少は市場外に於ける工業の分布を促進するも、亦他面に於て、原料の輸入が一層容易となるが故に、工業が市場の存在地に復歸する事を容易ならしむ。而してこの二つの運動は相互に平均化せんとするの傾向を有する。

工業分布の第二の要素は労働指向性である。即ち一噸の商品を生産するに必要な労働費の差異の如何によつて工業の移動が支配せられる。この要素を分析する爲めに、或る一定の地理的中心點に對する均等原費線を考案した。之れが有名なる *Isodapanen* である。第三の要素たる團集性は、工業の集中分散に基く生産費の差異である。而て團集性の概念中には、收穫漸増、漸減の法則、分業の得失、現存運送組織の影響等種々のものが含まれて居る。前の二要素に關する理論は純粹明瞭であるが、團集性はかくの如く種々の要素の複合物であつて、ウェーバーの研究に對する非難は大抵この問題に關するもの、如くである。併し私の考へでは、氏がこの團集性を提唱したのは、工業の分布を先づ國民經濟的に觀察して、一定の形態を以て工業が分布をなすと同時に、更にその工業分布地域内に於ては、所謂團集性によつて特殊の分布形態を呈するの所以を明かにすべき論理的基礎を與へたものにして、假令團集性の分拆に關し尙ほ多少の混雜があるにしても、ウェーバーの研究の長所は正にこの點に存するものと思ふ。

更に千九百十四年には資本主義的理論を概説した。之に於ては多少歴史的考察を遂げ、労働市場の觀念を展開して居る。而て彼は労働市場は實に現代の工業的編制に於て最も顯著なる様相で

あるとし、勞働市場としての大小都市の演ずる役割は、今日の種々の問題を解決する關鍵であるといふ。この他彼は更に一般的なる問題にもふれ、殊に貿易政策上よりしては舊歐洲の工業中心及び北米の工業中心が將來如何に成り行くかに關しても、その獨特の分布論を根據として論じて居る。固より彼は Oldenburg & Adolf Wagner の變異説 (Theory of catastrophe) の如き歐洲工業中心の没落を豫言する事に反對し、寧ろ樂觀的態度をとり、他面に於ては、チェムバーレンの所謂保護關稅的帝國主義は、工業分布論の關する限りに於て、相當の理論的背景を有するものとして居る。彼は世界に現存する五大石炭中心は今後共その重要さを保持すべく、又その破滅を見る事なくして然かも新中心が発生するに至るであらうといふ。併し最近人の注目を惹くに至つたエネルギーの運送問題はウェーバーに於ては餘り展開せられて居ない。この點につきては今後増訂せらるべきであらう。又最近の研究は戦後に於ける歐洲工業の地位に關するものであるが、それは主として獨逸の立場から見たものである。蓋し彼の從來の經濟學に對する態度及びその根本思想から來る當然の事と思はれる。

五

W. Sombart の Der moderne Kapitalismus も工業分布論を取扱へるものとして特筆すべき研究物である。彼はこの問題につきて國際間と國內とを區別して考へ、初期資本主義に至る迄、及び初期資本主義時代に於ける工業分布の變遷を歴史的に研究した。而してこの時代に於て工業の分布は尙ほ多くの非合理的様相を示す事を指摘し、併しこの非合理性は資本主義が高潮期に近づく

14) Industrielle Standortlehre (in Grundriss der Sozialökonomik 1914) Chapt. V, Vol. VI  
 Standortlehre und Handelspolitik (Arch. f. Volkswirt. Vol. XXXII Europäische Zollunion 1926)

に従ひ次第に除去せられ、工業の分布に於ては益々合理主義が實現せらるべきを述べて居る。最近公にせる「高潮期資本主義」に於ては、工業分布が最も合理的に行はれんとするの過程につきて論及して居る。<sup>15)</sup>

工業の分布は國際間と國內とによつて、その分布の原則につき多少異なる所あるは、即ち國內商業と貿易論とに於てその原則の異ると同一であり、又之が即ち貿易論の特殊性の前提となるのであつて、この問題を經濟地理學的に研究する事は、單に工業の分布論としてのみならず、更に貿易論の基礎附けに對しても大なる意義を有するものである。之と同時に各國民經濟體内に於ても、都市と都市以内の地域との間に工業分布に關して特殊の現象が現はれて來る。即ち工業が大都市内に集中し、又その中心點を去つてその周圍に移動し（或は全然都市と反對の地方に移動し）、或は特定の工業部門は都市の特定の地域に集中するといふが如きは之れである。近時多くの學者はこの方面に注意を拂ふに至つたが、就中、René Maunier<sup>16)</sup>及びO. Schwarzschild<sup>17)</sup>の二人は最も優れたものである。前者は主として歴史的社會學的立場から巴里につきて研究し、工業の移動には集中分散のリズムの存する事を明かにしたが、後者は主として統計的方法によつて獨逸殊に伯林につきて研究した。尙ほW. Sombart<sup>18)</sup>のこの方面の研究に貢獻する所がある。又London, New York につきてもこの種の研究物が發表せられて居るが、多少皮相的であり、且つ紛雜してゐるの嫌はあるが、この方面の研究には重要な文献たるを失はぬ。

## 六

15) Der Hochkapitalismus

16) La distribution géographique des industries (Revue internationale de Sociologie 1908); La localisation des industries urbaines 1909; L'origine et la fonction économique des Villes 1910.

17) Grossstadt als Standort der Gewerbe, speziell Berlin (Conr. Jahrb. f. N. Ö. und Stat. III F. 32, Bd., 1907).

18) R. M. Haig, Regional plan of New York of its Environs; 及び Quaterly Journal of Economics 1926. 中の二論文、

初に述べた如く、從來の經濟地理學者は工業分布に關する理論に關しては勿論、工業の分布そのものに對しても餘り關心を有せず、一般に工業産物の記述を以て満足して居たのである。只經濟地理學界では最も有名なる G. S. Chisholm の如きはこの問題に興味を有する地理學者の一人であるが、その研究は理論的考察に缺け、主として工業分布の自然的條件を論ずるに止り、かのウェーバーの理論は餘りに抽象的であると、之に對し好感を有しない有様である。<sup>19)</sup>併し次第に經濟地理學者もこの種の問題にふれる様になつて來た事は明かである。近年公にせられたる R. Bellemo の研究は極めて小さいものであるが、Ratzel, Vidal de la Blache, Brunnens 等の說に従つたもので、この種の研究としては優秀なるもの、一である。矢張り工業の分布に對する地理的要素の影響を述べたものであつて、工業の分布そのものに關する研究ではなく、從てラツチエルの地人相關的研究にすぎない。故に經濟生活は自然的事情の函數であるとし、工業分布の研究は經濟地理學と經濟學との二領域に屬するものとした。經濟地理學者の研究物として最も標準的のものは W. Crenzburg の著書である。<sup>21)</sup>彼は多年の研究の結果によつて、獨逸チューリングン地方に於ける工業分布の變遷を論じ、地理的要素、傳統及び歴史の影響の大なる事を高調した。殊に勞働の不動性を重要視して居るが、之はチューリングン地方の過去の特殊事情に基くものであつて、之を一般的理論とするは疑問である。何と爲れば近時勞働市場が益々擴大せられ、勞働は殆んど世界的に移動する様になつたのであるから。從て彼の研究は一定の歴史的地理的限定の下に於てのみ肯定せらるべきものである。

19) The geographical relation of the market to the Seat of Industry. (Scottish Geographical magazine April 1. 1910)

20) I fattori geografici nella localizzazione delle industrie (Milano 1925)

21) Das Lokalisationsphänomen der Industrien, am Beispiel des nordwestlichen Thüringer Waldes (Stuttgart 1925)

最近現はれたる工業分布論に關する研究は大體二つに分つ事が出来る。その一はある實際問題の記述又は解明をなさんとするものであり、二は工業分布論は經濟學の理論上如何なる地位を有するかを表明せんとするものである。前者に屬するものとして先づ舉ぐべきは、K. P. Berhold<sup>22)</sup>及び W. Kretschmer<sup>23)</sup>の二人である。Kretschmer は新聞に關する分布を研究し、新聞に於ては生産費の減少は大なる意義を有しない事を指摘した。又 R. Rasmann<sup>24)</sup>の研究はウェーバーの原則に従て上シレジャ地方の重工業につきて行はれたもので、この地方の重金屬工業は、ポーランドの南東地域に於て自然的市場を有する事は明かであるが、併し將來はブレスラウ地方に移動する事が出来るし、又移動せしむべきである所以を論じて居る。Joh. F. Hanrath<sup>25)</sup>の論文は、英國向輸出を爲す大屠場が何故に和蘭の Ems に設立せられたかを説明した極めて興味あるものである。

第二の部類に屬する研究は甚だ多い。而てこの種の研究は前者よりも一層効果が大きい。思はれる、何となれば之等は工業分布論の理論的方面及び分析方法に對して多くの光明を與ふるからである。B. Janowski<sup>26)</sup>は運送の距離及び運送費が、耕作の進歩、市場の形成、農業及商業、物價等に及ぼす影響を論じた。之は極めて抽象的理論的にして、數學と經濟學とを巧に結合せる有力なる研究である。又著者はチューネンの諸研究に論及し、運送費を測定する事によつて、距離の觀念を凡べての經濟活動の領域に引き入れた點が、最も特筆すべきものである。O. Engstrand<sup>27)</sup>は最近の國家學辭書第四版に於てチューネンとウェーバーとの理論を一體として結びつけよ

- 22) Untersuchungen über den Standort der Maschinenindustrien in Deutschland. Jen 1915.  
 23) Das Standortproblem im deutschen Zeitungsgewerbe. Jena 1922.  
 24) Das Auswanderungsproblem der oberschlesischen Schwerindustrie. Breslau 1922.  
 25) Zum Problem der hypothetischen und konkreten Standortbedingungen dargelegt am Beispiel der Grossschlachtereie.  
 26) O. odegtoś'ciach joko czynniku rozwoju Kultry, Lwo'w, 1908.

うご力めた。<sup>27)</sup>氏は多くの理論的例證を示し乍ら記述的方法によつて論じて居るが、全體を通じて幾何學的圖表、幾何的問題の蒐録の如き感がある。殊にその研究中には多くの曲解牽強の説があり、従てかくの如き抽象的な混雜せる公式が今後の研究の出發點となりうるや否やは疑問である。Federico Marconcini の研究も専ら運送が工業の分布に及ぼす影響を論じて居る。<sup>28)</sup> J. Schumpeter は生産の分配を研究し、<sup>29)</sup> K. Diehl はその著書中特に一章を設けて工業の分布を論じて居るが、之は大したものではない。<sup>30)</sup>更に工業分布論上注目すべきものは、G. Cassel と A. Predohl である。カッセルは價格形成の補論に於て、ある場合には一定の生産手段が他の生産手段と代替せられねばならぬ。而てこの代替は集中と大量生産との必要によつて制約せられるとし、工業分布の問題は、代替の原則に關連して生産手段の分配論中に於て論ぜらるべきものとした。Predohl の説によれば、<sup>31)</sup>生産は地表上最も集約的に開拓せられたる地域に集中し、従て生産及び消費の中心は理論的關係に對して最も好都合なる價格關係の内部になければならぬといふ。彼の研究は矢張りウェーバーの影響を受けて居るが最も正確である。併し尙ほ論じて盡さざる所も多々ある様に思はれる。

## 八

北米合衆國に於ては近々百年以來工業が發展し、今日では急速の發達を見るに至つたのであるから、工業の分布に關する研究をなすには最も理想的の國の一に數ふべきである。殊に研究費が充分に投せられ、材料も豊富に蒐集せられつゝあるので、この地方の研究には種々の便宜があ

27) Theorie des Güterverkehrs und der Frachtsätze, Jena 1924.

28) Saggio sulla rendita e sulle sue modificazioni imputabili all'azione dei mezzi di trasporto (Milano 1924)

29) Das Rentenprinzip in der Verteilungslehre (Schmoller Jahrb. XXX 1906)

30) Theoretische Nationalökonomie Vol. II. (Jena 1924)

9。Fr. Popplewell は合衆國に於ける工業分布問題が未だ世人の注目を惹かなかつた時代に米國の製鐵工業の分布を研究し、殊にその移動性につきて重要な結論に到達した<sup>31)</sup>。又獨逸人 H. Sohmacher は工業の移動につき獨逸と合衆國とを比較した<sup>32)</sup>。之等二人の研究を除いては、最近無數に公にせらるゝ米國人の研究物は、何れも Fr. S. Hall が第十二回センサスにつきて行つた方法を大體そのまゝに套襲したもので、主として工業經營上の問題として取扱はれ、工業分布論に對して新しき且つ深刻なる理論を確立したものは少ない。故に茲にはその主なる論作の題目のみを掲げることとする。

Malcolm Keir, Economic Factors in the Location of Manufacturing Industrie (Annals American Academy Political & Social Science 1921)

Walker Perley, Industrial Development of Kansas (Bulletin of University of Kansas, 1922)

L. C. Marshall, Business Administration (Chicago 1921)

Isaac Lippincott, Economic Development of the United States, New York 1924

F. A. Fetter, Quarterly Journal of Economics Vol. III, 1924.

W. L. Thorp, The Integration of Industrial Operation, Fourteenth Census Monographs IV, 1925.

Dexter S. Kimball, Principles of Industrial Organization.

W. Kent, Investigating an Industry

J. C. Duncan, The Principles of Industrial Management

31) Theoretische Nationalökonomie, Leipzig 1923.

32) Das Standortsproblem in der Wirtschaftslehre (Weltw. Archiv April, 1925)

33) Iron & Steel Production in America (Manchester 1905)

34) Weltwirtschaftliche Studien, Leipzig 1911.

## 九

以上は大體工業分布論に關する重要な文献につきてその概要を紹介したのであるが、工業の分布といふが如き、可なり限られたる問題であり乍ら、かくも多くの文献の存する事に徴するも、如何に多くの學者が之に大なる興味を有するか、呪はれるであらう。又之と同時にその論著の多數は純經濟學者によつて取扱はれ、經濟地理學者が干與しなかつた事は、以て從來の經濟地理學なるものが如何なる仕事をして居たかを推察する事が出来る。我々はこの種の問題を經濟地理學の領域に引き入るゝ事によつて、經濟地理學の體系を確立し、新しき獨立の學問としての内容を組織すべきである。かくする事によつて初めて國民經濟乃至は世界經濟の一の經濟體としてその空間的編制を明かにする事が出来、總て又一般經濟學の理論を基礎づける事ともなると思ふのである。

最近我國に於ても工業の分布に關する調査研究が次第に盛になりつゝある。實際我國は北米合衆國と同じく、否、それよりも一層新しく工業の勃興した國であり、殊にその工業形態が極めて特殊のものであつて、所謂工業定位の慣性が少く、比較的合理的に工業が移動するを以て、工業の分布を研究するには、恐らく最も理想的の國であらう。それは又工業計りではない。その農業も極めて周約的にして耕種式の分布も可なり合理的に行はれ、チューネンの理論が何人の教ふるとなく、自然的に行はれて居るといふ有様である。この事は最近來訪する外國の農業學者の最も興味を以て見る所である。かくの如く我國は一の國民經濟體としてその空間的經濟制の研究を

なすに最も好都合の事情にあるから、我々は獨逸のアルフレッド・ウェーバー教授の如き方針の下に、各人が夫々部署を分擔して、我國經濟の各方面に亘つて經濟の分布を地理的歴史的に研究する事が、學界に對して大なる意義を有するのみならず、更に實際上の問題としても重要な事柄であると思ふ。固よりかゝる研究の前提としては、詳密なる歴史的の研究並に正確なる統計がなければならぬが、幸にして今や我國は往年獨逸に於ける歴史學派勃興當時の如く史的研究が盛に行はれ、且つこの種の統計も次第に整備しつゝあるし、又統計的研究方法の大に發達しつゝある現狀に鑒み、かゝる學究的計畫は早晚實現しうるものと思ふ。現に昨年大阪市設産業部の調査發表になるところの「大阪市に於ける工業分布狀態」の如きは、實に詳細を極めたものであり、之によつて我々は工業分布論上に種々の示唆を受ける事が出来る。かくの如き調査は余の寢聞を以てすれば、恐らくは外國に於ても、餘り類例のないものである。今後この種の調査が各地に行はれん事を切望して止まぬ。